

## フリースクール NPO法人楠の木学園

創立 1993年4月  
横浜市港北区小机町2482-1

理事長 武藤啓司

### 楠の木学園の創立

1993(平成5)年 発足

「学習不振」、「問題行動」など叱責されたり、いじめにあう子ども。それは親の育て方でも、子どものわがまま、怠けなどでもなく、生得的な特性（当時は、学習障害・LD）と考える親たちが、そのような特性を認め、理解し、適切な教育をしてくれる学校を首都圏で探した。

**しかし、そのような学校はなかった。**

### 親たちの思いを知った企業がメセナとして

- どこにもなければ「自分たちでつくり出そう」と試行
- その活動を知った企業(株)ヤマタネが、当時盛んだった「企業の社会貢献(メセカ)」の一環として、施設の提供や運営を支援。
- 子どもが中学時代からの設立運動がはじめられたが、その実現には、かなりの歳月が費やされ、スタート時は高校生中心に。
- 全教科が教えられ、また障がいを持った子にも対応できるスタッフの確保。
- しかし、バブル経済の崩壊で、企業は撤退。(1996年)
- 以後、自力で運営することとなる。

### 参加する生徒たちの変化

- 最初、「義務教育終了前後のLD傾向およびその周辺にある子どもたち」のためにスタートしたが、その後、「現在の教育機関では適切な対応が望めずに悩んでいる子どもたち」の学び舎へ
- その後、「ADHD」「軽度発達障害」「高機能障自閉症」「アスペルガー症候群」「広汎性発達障害」などと呼ばれる生徒たちが次々と登場
- 2005(H17)年「発達障害者支援法」に基づく教育支援「自閉症スペクトラム」系の生徒の増加

### まだ、「発達障がい」という概念がなかった時代

- 「不登校」の子と「学習障がい」の子たちの混在
- 楠の木学園にたどり着いた子どもたちのほとんどが、不安感が強く、怖がり、そのうえ徹底して自信喪失、自己肯定感の欠如(「どうせ俺なんか」「なんにをやってもダメなの」.....自発性、創意に期待できない状況)
- 「LD」かどうかではなく、まずはその子、その個人をまるごと認めて受け入れることから

### 運営の理念としたもの

- 1 誰もが安心していられる場所
- 2 信頼関係の形成
- 3 自信の回復、失敗の容認
- 4 意欲(勇氣)の喚起
- 5 関係性の形成、コミュニケーションの力をつける

### 中等部・高等部・専攻科

- ・ 当初、「義務教育終了前後の生徒」を対象にしていたことから、高校終了後の進路保障のために「専攻科」を設置。
- ・ 専攻科では、高校終了後の2年間、SST、職場体験、職業実習などを通して、その生徒の適性に合った進路を選択することを支援。
- ・ 中等部の設立(2005年):中学生からの相談が激増。

### 2005(H17)年から 発達障害者支援法の施行

- ・ すべての公立学校で発達障害の子どもの理解を深め適切な「教育的支援、支援体制の整備」が求められようになった。
- ・ しかし、依然として補の木学園の役割は終わらない。
  - ① 普通学級に通っていたが、その特性の理解を得られず、つらい思いをしている
  - ② 個別支援学級、特別支援学校には行ったのに納得のいく教育を受けられない。

### 一つの事例(A君のケース)

#### 入学(中1)当初

入学式(4月8日)は特に問題なく参加。しかし翌日のオリエンテーションでは、混乱(びよんびよん跳ねたり、英語をしゃべり出したり…)

対応した教師が、当日のスケジュール表を見せると、その表の右上に、「疲れたら休憩できます」というのがあるのを見て、「疲れちゃいました」という。そこでカウンセリング室に案内し、休憩。

### 入学当初の様子から

- 1) 職員が直接話しかけると、拒否されることがある。  
特に、指示、命令のようなことばかけには、「拒否!!」「強制!」「命令!」などと言いパニックに。(強い拒絶感)
- (2) 「怒られる」「責められる」ということへの恐怖感のようなものがあるのではないか。
- (3) 勝ち負け(成功・失敗)へのこだわりが強い。
- (4) 人の顔を覚えることが苦手。先生の名前を言わない。
- (5) ある種の音や声が苦手、授業中でも混乱してしまう。

### 大人を拒否するA君への対応

- ・ 大人からの直接的な話しかけの拒否にどう対応したらいいか。  
→ スケジュール表、絵札(リマインダー)などを作成し、意思表示やコミュニケーションのツールを作るが、それだけでは十分なコンタクトが取れなかったため、人形やぬいぐるみを仲立ちにして話しかける。
- ・ 他に、紙に場面をイラストにして、その絵の主人公にこんなことをしてほしい、こんなことをいましてはならないんだなどと物語を作ることで意志を通じること。

### A君とのコミュニケーションツールとして



## 調理実習の際のコミュニケーション



がんばった時間割表

	1月	2月	3月	4月	5月
1	○○○	○○○	○○○	○○○	○○○
2	○○○	○○○	○○○	○○○	○○○
3	○○○	○○○	○○○	○○○	○○○
4	○○○	○○○	○○○	○○○	○○○
5	○○○	○○○	○○○	○○○	○○○
6	○○○	○○○	○○○	○○○	○○○
7	○○○	○○○	○○○	○○○	○○○
8	○○○	○○○	○○○	○○○	○○○
9	○○○	○○○	○○○	○○○	○○○
10	○○○	○○○	○○○	○○○	○○○
11	○○○	○○○	○○○	○○○	○○○
12	○○○	○○○	○○○	○○○	○○○

## 関係性づくりを楽しみながら

- 多様、重層化した発達障がいの子どもたちの課題への 求められる 理解と対応の柔軟性。
- 楽しさを通じた親密性、愛着感の醸成 → 他者への信頼感 → 社会性
- 個別支援からグループ(仲間作り)支援へ

## 義務教育期間終了後の若者への課題

- 義務教育期間ずっと不登校だった若者たち
- 基礎的な学力、対人関係への不安、自信不足
- 将来への絶望感が強い
- 高校生生活、高卒資格取得への願望
- 一人ひとりの特性、能力に応じた丁寧な進路指導
- 就職後の相談、フォローも

ご清聴ありがとうございました